

昭和16年2月1日 第3種郵便物認可  
平成22年7月1日発行（毎月一回一日発行）  
俳句雑誌 沖 第11巻第7号



沖

俳句雑誌[おき]

7月号

沖 発行所

# バイエルン

能村 研三

ドイツの旅

バイエルン・レーゲンスブルグ

灯涼しドナウ河畔の塩の庫

酔キャベツと焦げ目の強きソーセイジ

床に描かれし騎士の紋章五月寒

五月川古都を見つむる橋小僧

先日、市川市とのパートナーシティであるドイツのローゼンハイムで、「ガーデンシヨウ」という博覧会が開かれていて、五月の一週間を「ジャパンデー」と定め、市川の様々な文化団体から総勢二百名が同市を訪れ、様々な日本文化の紹介を行った。

この行事の前に、三日間だけ南ドイツのバイエルンの観光をすることにして、世界遺産の一つであるドナウ河畔の古都レーゲンスブルグ、オーストリアとチェコの国境の町でドナウ川などの三つの川が合流するパッサウ、オーストリアの音楽の都としても知られるザルツブルグ、そしてかつてヒットラーの保養地でもあったベルヒテスガーデン、ケーンヒス湖などを訪れた。いずれも歴史のある街で建物の重厚さと風光明媚な自然環境を堪能することが出来た。

今回の旅は、いくつかの行程に分かれており、「沖」からは、現地での俳句講座のお手伝いとして大森慶子さんと上田玲子さんが同行してくれた。また、二百人の市民団の中には、鳩鳥句会の市瀬千加子さんとは、

国境の町、パッサウ

合流のドナウ三川船遊び

柳絮とぶドナウほとりの城砦

ケーニヒス湖

トランペットのこだま返しや湖涼し

緑映の湖アルプスの水湛へ

ローゼンハイム・ガーデンショー

二百人の日本紹介風清し

乾杯はヴァイツェンビール白夜かな

かつしか句会の岡部知子さんも参加していた。また、娘の麻衣が現地で茶道のお手前などを披露するために同行することとなった。

私の方も現地で日本語学校に通うドイツ人に俳句の講話をする機会が与えられた。芭蕉の句から現代までの俳句を通して、俳句は十七文字で表現し、それぞれの季節を詠み込むことを解説したが現地の人からは大きな関心が寄せられた。

いづれドイツ人の中から、俳句に興味を持って投句をしてくれるような方が出てくれればと期待している。



能村 研三

# 蒼茫集



浜ことば

宮内とし子

白つつじ

北川英子

花こぶし実習生の乳搾り  
春眠の十分で時差生まれけり  
魯山人の皿の重たき養花天  
にはとりの一声高き穀雨かな  
神事継ぐ勇姿まざまざ御柱祭  
浜ことば飛んで五月の網手入

甲冑の飾られてあり明日手術  
前向きに病床八十八夜過ぐ  
遅々遅々となれど恢復期の緑風  
白つつじ看取りがへりの日暮道  
ナーズらに受けよき患者月日貝  
子嫁孫病室に薔薇絶ゆるなし

地球儀

楠原幹子

一年生

松本圭司

甘党の先師思へばあたたかし  
逃水を追うて深みに入りけり  
同じこと考へてゐる葱坊主  
藤浪にかすかな音のありにけり  
地球儀に知らぬ名の国春闌くる  
くつきりと矩形台形水張田

起さずに起きて一年生となる  
義理一つ抱へて急ぐ花菜道  
風船を手に少年の飛びたがる  
翅音におのが威を見せ熊ん蜂  
風吹けば風のかたちに柳絮とぶ  
四次元へ消えゆく春の流れ星

けふも夕日は 荒井千佐代

西坂や絵硝子抜けて春の日矢  
春疾風寺にバテレン殉教碑  
花ざくろ日暮れになれば死を想ふ  
白魚をすする脳裏に拷問図  
死に順を神の狂はす濃山吹  
枇杷熟るるけふも夕日は海に落ち

氷 州 千田百里

写真の母はいつも端っこつくしんぼ  
花の雨古木のやうな象の膚  
花季のをのこは淋し常磐木も  
氷州アイヌシトのマグマの熱し黄砂以後  
測量の視野を横切る水着かな  
灯を卓を躲しつつ来る生ビール

浜大根の花 辻美奈子

垂直に風切り安房は夏に入る  
風に砂とんで浜大根の花

夏潮のほとりに預け吾子ふたり  
吾子ふたり母の日のもう何もいらぬ  
つくづくと見るTシャツの前うしろ  
父よかの日の桐が疼くごと咲くよ

この頃が好き 成宮紀代子

予報士の念押す八十八夜霜  
竹の子の屈託もなく丈をなし  
納骨す風も言葉もぬくき地に  
ふるさとのこの頃が好き田水張る  
村に人の歩いてをらず鯉幟  
惜春のゆつくり閉ぢる絵具箱

紙風船 上谷昌憲

橋くぐるとき脇締むるつばくらめ  
山彦の呱呱の声とも泉鳴る  
麦秋へ突つ込んでゆくハイウエイ  
白樺の白の陰窮ほととぎす  
縁側は足垂らす場所粽食ぶ  
紙風船空気こぼさぬやうに突く

浮雲 久染康子

飛花化して浮雲となる吉野山  
湧くやうに遍路着峯を越えて来る  
かはら神鷹寺けを霞が呑んでしまひけり  
口笛で巢箱と交信してあたり  
職退いて主夫力磨く夫うらら  
子がふいに来て母の日の前夜祭

十円切手 辻直美

荷造りの少しあいまい菜種梅雨  
囀や時機をみてとは何時の事  
夏至の昼十円切手貼り足して  
水草生ふ見積り表の位どり  
蜜蜂のはたらく機能産む機能  
定員に春風も入るエレベーター1

春の雪 藤森すみれ

木遣唄遠くに山は芽吹前  
納屋奥を攻めて荒びぬ春の雪

玄関はわが家の入江春の雪  
蓼科の水の走りに花筏  
塗り終へし畦にけもの足かたち  
墓地までの日課の速歩風みどり  
幟 田所節子

幟立ち高階の風新しき  
家中の椅子の集まる端午の日  
鯉のぼり風に金の眼輝けり  
紗がかりの映像流れ昭和の日  
木々芽吹き嬰に個性の見えはじむ  
くらくらと日の照り花菜二万本  
荒布刈る 遠藤真砂明

橋大桁につなぐ川舟夏近し  
潮より青き船影五月来る  
鳶啼いて岬は豆の花日和  
荒布刈る濡れ身いよいよ力湧き  
網干して浜大根の花の昼  
葉桜の朝の窮りを風が疏く

小切子 森岡正作

ガリバーの如くに蝸蚪の水跨ぐ  
弔ひのやうに城址のつつじ燃ゆ  
五箇山に咽ぶ小切子春逝けり  
ランドセル置き田植機に触れたがる  
五月来る風香水香は双子の名  
実梅落つみな僧兵の顔をして

指形 吉田政江

水張田仕上げは夕日留めをり  
桜薬浴びて檜の井桁積み  
たんぽぽの絮おどろかす土手滑り  
早苗田を繕ひ一人となつてをり  
春障子児の指形にゆるみをり  
母の日や来し方すこし埋め合はす

桜撮る 菅谷たけし

桜撮るうしろに茫と奈良時代  
健忘症のやうに雨中の桜かな

世の中の混沌として蠅生まる  
行く春を翁偲びの句碑いし二十  
水草生ふあをき水流鯉泳ぐ  
春光を黄金に弾く軸やま披露目  
はがね光 武藤嘉子

しやぼん玉消えし数ほど星殖えて  
膝をさすりつ春愁のまつ只中  
世の隅にゐて菊苗を挿しにけり  
雲雀野やまぶしさ故の涙とも  
しばらくは閉ざすに惜しき夕桜  
水張田闇にはがねの光なす

闇の切れ目 望月晴美

花冷や闇の切れ目に二条城  
守護神の御目も語感もあたたかし  
心まだ阿修羅にありて落花浴ぶ  
組し家柄校生替へは縦横無尽花筏  
制服の眩しき背丈入学す  
夜廻りの足いきいきと戻りけり

# 潮鳴集

渡船待つ

林 玲子

渡船待つ列の中よりしやぼん玉  
シュレッター紙の詰まりし袋虎が雨  
養花天厄年とうに吹つ切れて  
港まつり船笛連れて風光る  
大連休しなしなと剥く露の皮

伸びざかり

高木 嘉久

マリナーに光る帆江ノ島に霞  
キャリーケースの赤が追ひ抜き春深し  
時計屋より振り子消えをり昭和の日  
日本橋に空呼ぶ話粽解く  
花は葉に新塔はいま伸びざかり

背伸びして

栗原 公子

やさしさの時に重たし藤の花



花みちて知る「儂し」といふ言葉  
春宵や思ひ出すこし脚色し  
うららかや君呼ぶために背伸びして  
朧夜の液晶画面に棲むイルカ

垂直尾翼

大沢美智子

囀や秀つ枝下枝と棲み分けて  
水尾しるく入船出船復活祭  
春霖やふつくら関東ローム層  
並び立つ垂直尾翼五月来ぬ  
放生の稚魚遡る立夏かな

ずれがちの眼鏡

井原 美鳥

春はあけぼの新聞のやつてきし  
あたたかし割りてたまごに黄身ふたつ  
ずれがちの眼鏡憲法記念の日  
竹皮を脱ぐや生来生一本  
父の日の鉄瓶みがくのみに暮れ

# 沖作品



市川市

和田 満水

埼玉

峰 幸子

市川市

清水佑実子

きつかけは補聴器のこと臍の夜  
春寒し重ねて座ねて足の指  
夏のやう冬のやう虻とまどへり  
鋸ペンチ壁に吊さる麦の秋  
鯉のぼり家族はいつも同じ向き  
街角に身を反らし見る初燕  
春雪のしづく始めのリズムかな  
花冷や一刷毛の雲動かざり  
初夏の風の高みに鱗鱗の目  
四方よりの風に揉まれつ磯菜摘  
王子村の名残の櫂芽吹きけり  
ねんごろに竹の子煮るも旅仕度  
旅に会ふ狸々軋こぼの山車被露目  
猩々のからくり人形美濃の春  
礼状の葉書すぐくる燕来る

# 能村研三選

神奈川

鈴木 浩子

千葉

鶴見 遊太

市川市

七田 文子

ウインドーの刃物鈍色花の冷  
脱ぎし靴次第に遠し磯遊び  
男子みな坊主頭や麦青む  
木道の下に水音遠郭公  
牛乳の白き量感朝ざくら  
噛むほどにミント冷たき夕ざくら  
花冷やワイングラスの脚線美  
春深し宙ひと粒に遅筆堂  
靖国祭雨後の玉砂利浄められ  
神楽坂おかめ桜は紅つくす  
希有希有し雨から雪の暮春かな  
樹木みな戦ぎ列島夏に入る  
年の数ほどは結構赤い薔薇  
新緑の森に身ゆだね無為の時  
母在さば百万本のカーネーション  
電話よく鳴る日卵の花腐しかな

# 沖作品 15句選評

\*  
能村研三

鯉のぼり家族はいつも同じ向き

和田 満水

核家族化が進む現代の家族社会にメッセージともなる句である。鯉のぼりとは元来日本の風習で、江戸時代に武家が始まった端午の節句である。旧暦の五月五日までに、男児の出世を願って家庭の庭先で飾られた紙・布などに鯉の絵柄を描き風をはらませてなびかせる吹流しを鯉の形に模して作ったのぼり。明治時代から真鯉と緋鯉の対で揚げるようになったが、昭和時代からは家族を表すものとして子鯉を添えるようになった。最近では女の子も含め家族全員の分の鯉を上げる家もある。鯉のぼりがいつも同じ向きであるように、家族も心一つにしたいという思いも募ってくる。

街角に身を反らし見る初燕

峰 幸子

燕は俳句では春の鳥とされているが、どちらから言うとも初夏のイメージの方が似合う。梅雨めいた湿った空を燕の颯爽とし

た飛ぶ姿からは初夏のイメージが強い。宙を自由に飛び交う燕の軌跡、この動きは目で追っていても追いきれない。ある時はその動きを捉えるため、自らの身を反らしながらその軌跡を追いつけた。

王子村の名残の櫛芽吹きけり

清水佑美子

先日の東京句会の王子吟行での句。王子は今でこそ大都会に含まれるが「王子の狐」と言われる位、明治期までは田舎であったようだ。王子村と言われていた頃は、名主畑野家が、その屋敷内に滝を開き、茶を栽培して、一般に人々が利用できる避暑のための施設を作り、「名主の滝」と呼ばれていた。現在もその面影をとどめるように鬱蒼とした森には櫛の木があり、私たちが訪れた頃は丁度芽吹き頃であった。

脱ぎし靴次第に遠し磯遊び

鈴木 浩子

昔から日本人には、忙しい農耕や漁労の仕事に入る前の春の一日を、野山や海辺に出て遊んだり飲食するならわしがあり、旧暦三月三日には「磯遊び」と言って、みんな海に出て遊ぶ風習があった。まだ海水もやや冷たく、最初のうちは、靴のまま波と戯れていたが、次第に興が乗ってくると靴を浜辺に置いてズボンの裾を膝までまくり上げ、波の中に足を浸すようになった。気がついて見ると、靴の置所から随分離れてしまった。

牛乳の白き量感朝ざくら

鶴見 遊太

この句は、普段の日常生活を詠んだものだが、健康的で明るい句である。牛乳の白さと薄いピンクの朝ざくらの色の配合も見事で、冷たい牛乳を一気に飲み干す元気な青年の姿を思い浮かべた。中七の「白き量感」という措辞が面白く、牧場から直送の味の濃い絞りたての牛乳のようにも思えた。